

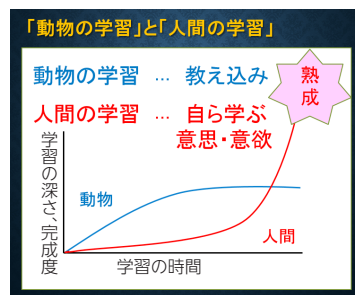
《高い能力は、じっくりと熟成させる》

犬に「お手」を繰り返し教え、早く覚えると賢い犬だと感じますが、人間は同じことをしても、賢い人間とはいえません。人間の知性とは、応用力や対応力ともいえるからです。仕事に置き換えてみると、単純に覚えるだけではなく、基礎基本を踏まえて状況判断し、いかに臨機応変に対応できるかが仕事力につながります。

一方、教育現場に目を向けると「早くできるようになること」に一喜一憂し、勉強でも運動でも繰り返し訓練させ、早く「できた」という形をつくってしまいがちです。その理由は、アニメやマスコミ報道の影響により「一つの道を究めることが大切」という概念のもと、幼い頃から一つのスポーツなどに徹底して取り組むと、優秀な選手になれるといった考え方があるからです。

しかし実際のところ、例えば落語家はすぐに落

語を教え込まれるのではなく、お茶の入れ方など必要な所作を含めた全体的な教育を受け、オリンピックのメダリストも技術を教え込まれたのではなく、自ら考え工夫して技術を身につけた選手が多いのです。



コーディネーショントレーニング(COT)の指導法には、早く形を作るのではなく主体的にじっくりと学習し、時には失敗をしながらも熟成することで、高い能力を身につける要素が含まれています。これが学校でCOTを導入する大きな意味です。

★次回「子どもが自ら培う能力」をご紹介します。

本庁舎学校教育課 内2365



未来へつなごう「仁」のころ

白河戊辰戦争回顧録

第5回 特別講演ダイジェスト

7月15日に開催された特別講演の内容を一部ご紹介いたします。

■過去を見ると未来が見える

加来耕三氏は、アヘン戦争における清国の惨敗が、当時の日本に衝撃を与え、植民地化されるかもしれないとの危機感が明治維新のきっかけになったと持論を展開しました。また歴史を学ぶ際、歴史小説などを読むだけでなく、疑って、数字を重視した考え方を徹底させて勉強してほしいと主張し「様々な問題がある中、我々は心豊かに生きていく方法を歴史の世界に学ぶべきだ。過去を見ると未来が見える」と語りました。

■日本人には寛容な心がある

テレビの歴史番組に出演している渡邊あゆみ氏は、白河口の総督であった西郷頼母や、関ヶ原の戦いが勃発した戦国の世にも両軍の死者を弔う心があったエピソードなどを紹介し、本来日本人には寛容な心があると信じていると語りました。司会を務めたシンポジウムでは「人として一番大切なものは何か、きちんと考えながら立ち止まり、過去の歴史に学んでいく。今日をきっかけに、そういう歩みを進めたい」と思いを込めました。

■どうやって戦争を回避するか

山本むつみ氏はシンポジウムから登壇し、震災をきっかけに製作した『八重の桜』に触れ、あまり知られていない会津の歴史を描き、復興を支援したかっなど作品への思いを語りました。「今を生きる私たちは、歴史を俯瞰することが出来る。『なぜ』を学ぶことが歴史を知ると、一番大事なことです。戦争が起きると、新しい兵器や技術がどんどん開発されるが、それをどうやって使わず、どうやって戦争を回避するか考えることが人間の知恵だ」と訴えました。

■地方のありようを考え直す

鈴木市長は、明治維新の中央集権体制による近代化を評価したうえで、日露戦争後は「見たくないものは見ない」という風潮によって客観的な分析ができなくなると指摘しました。これからの国や地域づくりの進め方については「住みよい社会を作るための努力や工夫を続け、地方が元気になっていくことが大切である。戊辰戦争150年は単なるお祭りではなく、歴史を踏まえつつ、国や地方のありようを再度考え直す絶好のチャンスであると思う」との考えを述べました。